

技 術 に つ い て

岡 昌 宏

On Technique

Masahiro Oka

技術は人間が人間としての自覚にめざめた時に始った。人間が人間として生きるために技術の必要なことはいうまでもないことである。しかし、それはただ単に自然科学を基にした近代的技術のこののみを意味するのではない。近代的技術を今仮に「第二の技術」と呼ぶとすれば、この第二の技術の底には人間的生に根ざす「第一の技術」が横たわっている。シリングが「技術はなお技術の哲学ではない」(Schilling, *Philosophie der Technik*, S. 7) というのも、第二の技術としての近代的技術の底に第一の技術が存在することを物語り、また、第一の技術の重要性を物語っている言葉と解することができる。シリングは、技術の哲学の課題は「技術とは何か」「技術は人生のなかで如何なる意味をもっているか」を問う(Ibid., S. 7) ことであるとしているのであるから、まさにこの第一の技術を問い、それを明かにせんとするものであることは明瞭である。さらに、「技術は近代技術とは同一ではない」「人間の存在とともに古くから存在する」とし、技術の底に「生の技術」*Technik des Lebens* を見ている(Ibid., S. 8) ところにも、このことははっきりとあらわれている。たしかに第二の技術としての近代的技術の底には第一の技術としての生の技術が横たわっている。その点に先ず第一にわれわれは着目しなければならない。この第二の技術としての近代的技術を知性的自己把握とするならば、第一の技術としての生の技術は知性を超える自他の相互把握といい得るものである。あるいは、それをさらにつきつめていくと、自他をも超えるものによる限定が含まれているであろう。そこに技術の問題にまつわる最も根本的な秘密が存在する。

近代的技術が生みだした機械文明による人間の疎外はしばしば色々の形で論じ

られてきた。今ここでことさらに述べる必要もないことであるかもしれぬ。しかし、近代的技術が生（いのち）の技術と全くかかわりをもたぬものとして、人間の生を疎外する形で存在することに対する洞察と探求は、技術の問題を考察する場合、先ず第一に考えられねばならぬことである。その探求は当然、近代的技術がその底深くに人間の技術としての第一の技術を内蔵しておらねばならぬという当為が存在することに対する考察を促してくる。これが第二の問題である。しかし、それらのことを明かにしていくためには、技術がどのような発展を遂げてきたかという技術の歴史的歩みを回顧してみなければならない。

技術はたしかに、ヤスパースの主張する如く、欠乏から解放され、その解放にふさわしい環境の形態を獲得するために、自然の現存在を形成する目的に対して科学的人間が自然を支配する方法である（Jaspers, Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, II, 2）。古来技術は自然を支配するために働きつづけてきた。したがって、技術は人間の自然に対する日々の在り方を根本的に変革せしめてきた。その源を探てみると、技術は宗教、神学のなかにあらわれる世界創造 *Weltschöpfung* のなかにあらわれている。これに対して、それをどのような技術と考えるかについては種々の異論はあるのであるが、技術がそこに働いていることを否定することはできない。その後人類は始めて火を使用するようになったのであるが、その時がこの世界創造以後の人類史における技術の開始である。火の使用は人類史に一つの転機をもたらしたが、その後の技術の発展は世界を変革し、また、その変革した世界は技術を進展させていった。歴史的に見た場合、一大変革期と見られるのは十八世紀の J. ワットの蒸気機関の発明に始まる産業革命である。産業革命は産業構造を変革し、社会構造を変革した。現代のオートメーション機械の出現が第二の大きな変革をもたらそうとしていることは周知の通りである。技術という観点に立てば、近代から現代にかけて急速な、目を見はるばかりの進展を見せている。自然科学の発達が生（いのち）の技術とつながっているのであるが、これが近代的技術と呼ばれているものである。

近代的技術の開発は産業革命を引き起こし、人間の生活に劃期的変化をもたらした。また、経済組織、社会組織を変え、人間の労働を大きく変えていった。そう

して、それはわれわれの生活を豊かなものにし、自然制服への人間の野望を大きく満たしていった。現代のオートメーションはいよいよその道を大きく示してくれたかの如くに見える。また、それはたしかに事実でもある。しかし、同時に近代的技術から生まれた諸々の問題が大きく取り沙汰されるようになってきた。経済的観点から指摘したものも多いし、精神的意味から指摘したものも多い。それらはいずれも充分な解明を見ていない。しかも、その解決が示されないままに、現代のオートメーションは大きな進展を見せた。それと同時に、近代的技術の包蔵している問題点も一層大きな姿を見せてきた。傷口も大きく開いていったのである。近代の限界 云々ではすまじ得ないような新たな問題をも 伴ってあらわれてきている。人間がオートメーション主義に対してその人格をもって対処する **zahlen** 限り、非人間主義が新たな進行を始めることになることは明らかであり、残酷さ自体が非常に計画的な冷い様相を呈してあらわれている、というユンガーの言葉は深く味わうべきであろう (F. G. Jünger, *Die Perfektion der Technik*, S. 313 ~4)。技術の進歩はたしかに大きな貢献を諸々の分野にもたらした。しかし、その裏側にひそむ問題点もその進歩に应じていよいよ大きなものになっていった。一方では、たしかに技術に対する呪物崇拜的な神化 **festischistische Vergötterung** が存在する。プロメテウスの熱狂性さえ伴っている。ベーコンの「知は力なり」の思想に裏付けられながら、その相貌を一新し、オートメーション的な速度と苛酷性をもってその姿をあらわしつつある。かつてコロンビア大学を中心に起った **Technokratie** の考え方はこのことをよくあらわしている。いうならば、知性的自己投影としての第二の技術は加速度的に増大してきた。技術によって引き起される諸々の問題点は技術によって克服せねばならないということが最大の使命であるかの如き時代が出現せんとしている。しかし、技術による自己克服は所詮自己克服以上をでるものではない。克服自体が技術の内部において行なわれるのであるが、克服そのものに問題点がいくらかでもでてくる結果を生んでくる。世界創造においてもった意味はいよいよその影を薄くしていかなるを得ない。もちろん、技術を第二の世界創造と考えるデッサウアーの考え方は今日においても依然として真であるが、一面において、自己克服を繰り返す技術は **un-**

heilig な性格をいよいよ深くしていることを見逃すことはできない。

第二の技術の進歩は自然の支配をいよいよ決定的にしたかの如くに見えるのであるが、第二の技術による自然の支配は逆に自然による人間の支配、技術による人間の支配を生みだし、人間の変革を迫ってくる。その変革の強風が現代は吹きつけつつある。その強風の吹きつけが技術のうずのなかへの埋没をいよいよ深めつつある。しかも、その深さは人間恢復の道を閉ざしてしまう如き次元に突入しつつあるかに見える。今それを「第三の技術」と呼ぶとすれば、正に現代は「第三の技術」の時代であるといつてさしつかえない。技術はそれ自体の次元において自己完成を示さんばかりの勢いである。少くともその様相を呈していることは認めねばならない。そこに現代の隆盛と盲点とが集約化されている。その根拠は「第三の技術」への道にあるといつてよい。その意味の時代の変革が無気味な様相を呈して姿をあらわしつつある。非人間的な断絶の時代といわれるものがそれである。人間が病的性格を帯びてきている。断絶を超えると叫ばれながら、その叫び自体断絶のなかで叫ばれているという背理さえ起っている。第三の技術の世界こそ明快な世界を出現させ、病的世界を恢復し得るという確心のようなものがあつたのであるが、病的性格をいよいよ深いものにしていったことは否定し得ない事実である。ユンガーのいうように技術の自動化が極点に到達したところに生まれる技術的 Kollektiv の時代 (Ibid., S. 318) が出現し、今までの技術という概念をもってしては理解し得ない新しい種の組織を作りだす新しい種の技術が生まれてきた。Universalarbeitsplan といわれるものがそれであろう。それは国家や民族の陥った難点を解決するものとしてあらわれたのであるが、それがまた人間をむしばみ、人間を迷妄のなかに自己喪失させつつある。かかる状況のなかにあって、逆コペルニクスの意味がこのコペルニクスの転回の外側から滲透することが熱心に求められてもいるのである。

その熱望に答えるためには、われわれは先ず第一に「技術の完成をどこに見るか」という問いに対して誤りなく答えることができねばならない。そのどこを適切に答え得るかいなかにかかっているといつても過言ではない。技術は技術の自動化、技術内部の自己克服運動によって完成に向っていくが如くに見える。しか

し、それは真の完成 *die echte Perfektion* とはいいい難い。無限の進展を示しても、その進展を支えるものが欠けているからである。シリングは「技術の超越」“*Transzendenz*” der Technik ということを行い、そこに技術の真の完成があると考えている（Schilling, *Philosophie der Technik*, S. 208）が、そのことの意味をわれわれは省みてみる必要があるであろう。技術の超越こそが技術を真の完成へと導く根本的動力である。われわれはそのことの意味をはっきりと捉えねばならない。インダストリアニズムを生かす道もまたそこにあるというべきである。それは、端的に言えば、第一の技術としての生の技術、人間の存在とともに古くから存在する技術に対する誤りなき洞察である。知性的自己把握としての近代的技術の底に存在せねばならぬ知性を超えるものを浮き彫りにすることでもある。また、人類愛の存在するところ技術への愛ありというヒポクラテスの逆説的思考を思い起し、再確認することでもあろう。技術の真の完成は技術の超越が行なわれるところにあられる。対象的、計量的知性としての技術、それに基づく *Fortschrittsglaube* では如何ともし難いものがあることに対する洞察がこの技術の超越の道を開示してくれる。技術の超越は計量的技術の進歩とは本質的に異っている。たしかに技術は不断に革新され、脱皮を行っていかねばならない。それは技術の論理の自転作用であるとともに、また、時代と社会の要求するところでもある。しかし、その革新と脱皮は技術の超越によって滲透されねばならない。技術の完成の場は技術の超越にある。その超越こそが革新と脱皮にその意味を与えてくれる。超越を喪失した革新と脱皮は技術の遊戯と化してしまうからである。技術の遊戯としての革新と脱皮もたしかに重要なことである。三木清がマイエルやヤスパースの言葉を引用しながら、技術の害悪について論じている一方では、ヴェントの思想から「技術の祝福」について述べている（三木清著作集、第7巻、技術哲学273頁～278頁）のはそのためである。しかし、ただ単なる遊戯は遊戯のなかに自己を埋没させ、喪失させる危険をはらんでいる。それ以上のものをもたらしものではない。創造の行為としての遊戯はそこからは生まれてこない。創造の行為としての遊戯はただ単なる遊戯ではあり得ない。

ただ単なる技術の進展から創造の行為としての技術が誕生するためには、その

完成点がどこにあるかをはっきりと見定めねばならない。しかも、その完成点を隨機に実現していかなければならない。遊戲としての技術は技術の空転を生む可能性が多い。技術が文化と結びつかぬ可能性も大きい。二十世紀は技術と文化とを結びつけようとするものであった。しかし、その意図にもかかわらず、形成作用としての文化とは背反していくばかりである。それはまた人間性、人格性との背反を引き起すという結果を生んでくる。さらには、その背反が増大していくと、文化を破壊し、人間性、人格性を破壊していく。不信 *Mißtrauen* と不安 *Angst* の時代が到来したといわれるのも、その理由の一つはここにある。A. Künzli が「西欧的病い」*die abendländische Krankheit* と称しているものがそれであるが、その病いは増大していくばかりである。人間性を拡大し、文化的価値を増大し、その荷い手となることができなくなりつつある。われわれはここで再び世界創造の地点に引き返してみ、そこにあらわれた技術のもつ意味を考えてみる必要がある。その技術には計量的、対象的知性に基づく技術の意識は存在しなかった。技術はたしかに存在したが、その技術には計量的、対象的知性は存在しなかった。現在のわれわれから見ると、*apokalyptisch* な性格をもち、また、近代的知性をもっては考えられないような性格のものであった。しかし、その点をこそ注目しなければならない。そこに含まれている意味をつかみ取らねばならない。それはまた世界創造の以前に溯って、創造の泉となったものを見究めることにもなるであろう。

技術の革新はたしかに多くの閑暇をもたらしてくれた。その閑暇はその革新を意味あらしめるために用いられねばならない。閑暇は適当に処理すればよいとか、閑暇は人間について考えることに使用すればよいという風なことでは済ますことのできない根本の問題に逢着していることにも気付かねばならない。技術は人間から離れて技術として独走的進展を示しつつある。技術は科学者と技術者に委ねておけばよいというという風な考えがいよいよこの独走性に拍車をかけている。技術は技術自体の論理をもち、その論理に沿って人間の倫理さえそのなかにもみこんで進行していこうとしている。しかし、技術は決して人間と離れては存在しない。いな技術の底には人間の技術が存在せねばならない。しかも、その人

間は対象的、技術の人間でないことはもちろんのことである。そこに技術の意味の再検討を迫られる必然性がある。ヘルマン・レイ (Hermann Ley, Technik und Weltanschauung) は技術の進歩の必然的帰結としていわゆる “volle Entleerung” を挙げているが、これは、技術の構造を支配するけれども、自己を疎外せず統一的である Gesellschaftsfreundheit の感情で滲透される個人意識を生みだしていくものでなければならない。volle Entleerung は、技術が技術のなかに埋没する限り、満たされることはない。それを満たすためには、技術の超越を必要とする。

ヘルマン・レイは「近代的技術の哲学的問題に対して」という問題設定において、先ず「社会秩序、経済、科学と技術は相互に関連している」という言葉をもって始めている。人間が社会を構成するところから技術が始まり、経済活動と深い関連をもち、また、科学の誕生、進展と絡み合っている。このことを否定する人はないであろう。近代的技術はそれらと関連して急速な展開を見、さらにそれらが新たな社会秩序、経済、科学の進展を促進していることは事実である。こうして技術的人間が急速に生まれていった。人間の技術、人間的技術であるべきものが技術的人間へと逆転していき、人間をそのなかに没し去らんとするかに見える。さらには、社会秩序、経済の世界をもそのなかに包みこんでしまわんとしているのである。ハイデッガーが「技術論」において、人間は「立て組」 Gestell の挑発の連鎖のなかに立ち、もはや真なる意味において自己自身に、人間の本性に出逢うことができなくなっているとしているのも、このことを物語っているといわねばならない。単なる技術から技術の本性に到達し得ぬとするのも、技術の本性へと立ち帰ることの急務、そうして、そこに横たわる人間の本性を見出し、それに出逢い、それを自己のものとして人間の本性を実現していくことを力説していくものと考えねばならない。技術の歯車のなかで激しく廻転しつづけている。その廻転がよいいよ技術の本性を、また、その奥にひそむ人間の本性を喪失せしめつつある。その喪失せしめられたものは激しい光を放って表面で輝いているのであるが、その輝きが見えなくなっているのである。技術の盲目性といってよいものが生まれている。その盲目性が技術の本性、人間の本性とかみ合う

歯車を見出し得ない状況を作りだしている。ハイゼンベルグは、われわれはもはや全体としての世界の *interrelation* を世界の創造者の意志として見るような幸福な時代にはいないが、なおその希望は残されており、その希望は探求の躍進力たり得ると考えている (Heisenberg, *Philosophic Problems of Nuclear Science*, p. 94) が、その希望の源泉は盲目性からの脱出、失なわれた人間の本性との歯車の発見、その歯車の正しき廻転である。さもなければ、混乱は増大し、破局への道が待ち構えている。第一の技術というものはこの破局を救う希望の源泉、盲目性からの脱出の希望の光に外ならない。

しかし、盲目性からの脱出のためには、盲目性をただ指摘することにとどまってはならない。技術自体のなかにのみ、盲目性の開眼を要求しても、盲目性が開眼されることはない。技術の本性、人間の本性の側にも開眼への希望の手を指しのべる用意が必要である。残された希望はそこから開かれてくる。作るものとしての主体の自覚が喚起されねばならない。人間は作られるものとしての人間にとどまることはできないし、また、とどまってはならない。目まぐるしく進展する技術の姿を把えるところから、始めて技術の盲目性が自己の姿にめざめてくる。その努力がない限り、技術は人間を不在化して、いよいよ非人間的独走を続けるばかりである。目的のない独走が果しくなくて、その独走の間に人間性の滲みでる時もなくなくなるばかりである。人間はいないかといって、人間のうごめいている世界のなかで探し求めねばならぬような世界が出現しようとしている。そのような状況に対する開眼は、技術の本性に対する洞察が技術自体からは生まれてこないということに対する明確な開眼の道を約束してくれる。人間の側からの手の指しのべが必要とされるのである。技術の外側からのみでなく、技術の内側の理解をも必要とする。その理解が技術の盲目性からの脱出を助けることができる。盲目が盲目のなかに閉鎖しようとする固き殻を自己の側から打ち破っていかねばならぬという方向がでてくる。しかも、その自己否定の働きの目標をはっきりと見定めつつ、盲目からの自己脱出を敢行することになるのである。

一般に自己否定作用は自己の内部からのみでは困難なことが多い。技術の場合にもそのことが妥当する。他者からの触発が必要であるが、他者からの触発が自

己の外側にとどまる時なお困難は残るものである。その触発はもっと自己の内部に侵入したものでなければならない。ヒュームによって独断のまどろみをさまされたカントのことを考えれば当然のことであろう。近代的技術から第三の技術への進展は、いわば、人間の生の手段としての技術の進展と、その手段を目的化してしまうように思われる変貌を引き起した。技術はその本来の姿に返る自己否定を果さねばならないのであるが、その自己否定は喪失した人間の本性が技術の内部への理解を示しつつ否定作用を促進することが第二の要件としてわれわれにのしかかってくることを忘れてはならない。技術の祝福が真の意味において成り立つとすれば、このことはまた必須の課題でもある。絶望の裏返された祝福は祝福たり得ない。その理を覚り得た時にのみ、真の祝福への希望がたしかに存在することへの道が開かれ、そのための実践活動が起ってくるのである。

筆者紹介：

大正13年生まれ。昭和23年京都大学文学部哲学科(倫理学)卒業。
現在 広島商科大学教授

主要著書

Einladung zum Denken (青山書店), コプルストン『現代哲学』(エンデルレ書店)